

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H24. 12. 12)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千トン)

項目	23年度		24年度			
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	53 (1)	56 (2)	50 (2)	51 (3)	50 (3)	50 (3)
規格	459 (122)	466 (124)	447 (100)	399 (77)	390 (67)	370 (57)
合計	512 (123)	522 (126)	497 (102)	450 (80)	440 (70)	420 (60)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 24年度2Qの切断量(実績)は、前期比47千トン、9.5%減の**450千トン**と大幅に減少。

これはリーマンショック後の切断量として、21年度2Q(406千トン)、21年度1Q(435千トン)に次ぐ3番目に低い水準である。

■ 3Q(想定)は、**440千トン**程度(前期比▲2.2%、前年比▲14.1%)と想定。

・10月149千トン(前月比+6.4%) + 11月(速報)146千トン(同▲1.9%) + 12月(想定)140千トン(同▲6.7%) ÷ 440千トン

・21年度3Q:前期比+15.4%、22年度3Q:同+2.2%、23年度3Q:同▲3.0%

■ 4Q(想定)は、**420千トン**程度(前期比▲4.5%、前年比▲19.5%)と想定。

・建設関連需要:前期比横ばい、建産機関連需要:同▲15%、その他:横ばいと想定。

・23年度の期平均513千トン、月平均:171千トン。⇒24年度4Q:140千トン/月

・21年度4Q:468千トン、前期比0.0%、22年度4Q:515千トン、同▲5.1%、23年度4Q:522千トン、同+1.9%

■ 24年度計(推計):1807千トン(前年度2050千トン比▲243千トン、▲11.9%)

21年度(1776千トン)以来の200万トン割れが見込まれる。

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q:+6.3%、2Q:+6.6%、3Q:▲3.3%、4Q:▲24.8%

21年度1Q:▲34.1%、2Q:▲37.9%、3Q:▲25.0%、4Q:▲4.0%

22年度1Q:+13.5%、2Q:+26.3%、3Q:+15.8%、4Q:+10.1%

23年度1Q:▲1.1%、2Q:▲0.5%、3Q:▲5.6%、4Q:+1.4%

24年度1Q:+1.7%、2Q:▲14.7%、3Q(推):▲14.1%、4Q(推):▲19.5%

2. 業況

厚板シャー業界を取り巻く状況を概観すると、需要環境は建産機部門の急激な落ち込みにより、前回報告時点（9月）に比べ更に悪化している。建築関連も期待された首都圏の大型建築案件の着工が大幅に遅れており、足元のシャー加工量も端境期入りを余儀なくされている。

今後の見通しについては、①現下の海外情勢からみて、建産機部門の低迷が長期化するとの見方が多いこと、②建築・橋梁分野についても発注のヤマが来春（来年度）以降にズレ込みそうであること等から、4Qのシャー切断量は、需要回復の材料を欠いたまま、「大底」へ向かうものと予想される。25年度1Q以降の回復に期待したい。

こうした状況下、建設分野では、ゼネコン及びファブの競争激化による値引き要請や、海外調達志向が依然根強く、苦慮している。また製造業分野においても、円高等による製造業の海外調達比率の上昇、生産拠点の海外シフトの動きに加え、輸出市場における製品需要の急激な減少など、シャーの経営環境は一段と厳しさを増している。

ちなみに、当組合が実施している月次統計「鋼板流通調査」結果により、足元の「切板需給」状況をみると、23年度1Qを底に本年度1Qまで緩やかに改善したが、2Q以降、建産機関連需要の急減が響き、一転して緩和状態を呈している。

まず出荷量は、23年度（178千ト/月）は期を追って増加傾向を辿り、24年度1Q（181千ト/月）まで堅調に推移した。しかし2Qに入り、7月179千ト、8月167千ト、9月160千トと減少し、その後も10月172千ト、11月170千ト（速報）と、低調に推移している。一方在庫量は、仕入れ量が出荷の急減に対応できなかったため、8月以降再び増加し始め、10月末には351千トに達した（11月末（速報）は345千トと微減）。この結果、在庫率は、急激な建産機需要の落ち込みを反映して、8月以降適正水準の200%を超えて推移している。11月（速報）も204%と依然高止まっている状況。

先行き需給は更に緩む可能性があり、適正かつタイムリーな対応が重要である。

また、全国のシャー各社からの情勢報告を整理すると概要以下の通り。（12/7 市場委員会）

- ▶ 【北海道】鉄骨需要は、目玉3物件（三井JPビル、北海道新幹線函館車両基地、札幌競馬場）の着工に加え、倉庫や店舗など中小案件も動き出し、増加基調が続いている。しかし橋梁は昨年度に比べ半減状態である。シャー各社は鉄骨の回復から高稼働を維持。
- ▶ 【東北】震災工事が真っ盛りの三陸地区は護岸工事を中心に鋼管杭・矢板の需要が多く、しばらくは資材不足・人手不足が続くだろう。建築は大型案件が少なく、関東物件への依存が続き、需要回復まで各社しのぎを削っている。仙台駅東口再開発、地下鉄東西線、福島企業立地補助金による工業立地など明るい材料もある。
- ▶ 【新潟】H・M グレードファブは高稼働も、今後1ヵ月程度は谷間になるとみられる。地場建築物件は目立った物件がなく、安値・受注減少に各社苦慮。建産機の落ち込みも

激しく、受注が大幅に減少。

- 【東京】足元の鉄骨・橋梁分野は低調に推移。先行きも橋梁は引続き低レベルで推移し、鉄骨も大型案件の着工遅れの影響が年度内継続する見込み。建産機も夏場頃より受注減が顕著になり、一部機種を除き全般的に低迷の度合いを増している。
- 【中部】建産機関係は、9月時点と変わらず大型建機や造船向けの激減により、悪い状態のまま新年を迎えそうである。来年3月末には金融円滑化法の期限切れに伴い与信問題が危惧される。建築は上向き傾向で、ファブの山積みは来年春まで確保している模様。しかしシャーの実感は乏しく、相変わらず小ロット・短納期物中心で、70%前後の稼働にとどまっている。
- 【大阪】鉄骨は店舗、物流倉庫中心に動いているが、大型建築案件は新ダイビルのみ。H・Mクラスのファブは仕事を年度末ごろまで確保している。ゼネコンの受注競争が激しく、鉄骨単価は下落傾向。建機・造船向けの需要は大きく減少している。
- 【九州】足元のシャーは、“忙しいのに儲からない”状況である。小ロットで加工ト数が増えず、切板単価も下落し、底が見えない。鉄骨案件は小規模案件（倉庫・店舗）を中心に増えてきているが、造船・建産機の需要不振が全体の足を引っ張っている状況。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建設機械は、国内向けは堅調に推移しているが、中国向けや新興国向けの外需不振が足を引っ張り、全体では大幅に落ち込んでいる。最大のウエイトを占める「油圧ショベル」も激減しており、需要家は大幅な生産調整に入っている。これによる関係シャーへの衝撃は大きく、加工量の大幅減少を余儀なくされ、一時帰休を検討し始めたシャーも出ている。「建設用クレーン」は、排ガス規制前の駆け込みや北米向けの回復等から堅調を継続している。

鉱山機械は、鉱山資源需要の減少と価格の下落による鉱山開発の中止・延期から販売が激減し、需要家の生産調整は長期化しそうである。

重電関係は、国内原発案件がほぼ停止している中で、火力発電関連は国内外ともに案件が多く、今後期待される。国内火力のリプレース案件も増加する見込み。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、上期の開札量は年初見込み通り9万ト程度であったが、①開札が2Q（特に9月）に集中したこと、②開札された案件がファブでの設計工期を要する物件（NEXCO等）であったことから、2Qまでのシャー加工量は低位に推移している。本年度の橋梁開札見込み量は、現時点で約25万トと当初予定から大きな変化はないが、今後、早期開札量の増加が期待される。

一方、建築鉄骨は、首都圏を中心とする大型建築案件（オフィスビル、総合物流倉庫等）の着工遅れの影響により、引続き大手ファブの仕事量は低迷している。シャー加工量も盛上がりを欠いている。一方小型案件は件数も多く、足元の中小ファブは繁忙の模様。

大型案件の着工遅れの影響は、年度一杯残る可能性がある。来春以降のシャー加工量の増加は確実視されるが、足元の“端境期”対応に苦慮している。

(3) 一般店売り分野については、主要分野である中小建築に動意が見られ、受注状況に

も変化の兆しが出始めているが、地区や関係シャーによって差異があるなど、総じて閑散とした状況が続いている。相変わらず各地区とも小ロット・短納期の商いが中心で荷動きは低調のまま推移しており、60%前後の低操業を余儀なくされている。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは、低迷する内外需に見合った調整を続行し、需給緩和の解消に努めているが、メーカー事情はそれぞれ異なっているようである。

こうした状況下、①各ミルの定修が計画されていること、②韓国材を中心に高水準の入着が続いていること、③10月1日、合併により新高炉メーカーが誕生したことなど、今後、これらによる厚板需給への影響が注目される。

なお、シャー業界が抱える主要課題は、以下の通りである。

- ①建設分野を中心とする需給ギャップ問題
- ②適正加工賃の確保
- ③与信管理、雇用対策(雇用助成金の申請、セーフティネット保証制度申請等)
- ④コンプライアンス対応(品質証明、独禁法、輸送条件問題、等)
- ⑤円高と製造業の国内空洞化
- ⑥建築分野における輸入鉄骨問題
- ⑦電力料金などコストアップ問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全 体】

下期に入り、低レベルながらも、足元の橋梁・鉄骨分野は、回復傾向を辿っている。

今後の動向は、橋梁は開札量の進捗いかんによるが、全国総量が伸び悩む中で、シャー切断量は現状レベルで推移する見通し。また大型鉄骨案件の着工遅れの影響は、年度内継続する状況であり、Sファブの山積み回復は来春以降になる見込み。

【橋 梁】

橋梁開札は、上期9万トン前後と年初予想通りであったが、①2Q(特に9月)に集中したこと、また②開札された案件が、ファブの設計工期を要する物件(NEXCO等)であったため、2Qまでのシャー切断量は低位に推移。下期に入り、上期開札案件のファブ加工も開始され、シャー切断量も低レベルながら増基調。

本年度橋梁開札見込み量は、現時点で約25万トンと当初予定から大きく変化ないが、各ファブともこの開札量に懐疑的な見方を持ち始めており、入開札動向を要注視。早期開札量の増加に期待。

【鉄 骨】

首都圏を中とする大型建築物件の着工遅れの影響により、Sグレードファブの仕事量は引き続き低迷。シャー切断量も盛り上がりや欠く状況。一方小型案件は、件数も多く、足元のH

グレード以下のファブは繁忙の様子。着工遅れの影響は、年度内残る可能性あり。来春以降の加工量増加は確実視されているところだが、足元の“端境期”対応に苦慮。

(2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

【全体】

比較的好調を持続してきた建産機系シャーは、夏場頃から受注減少が顕著となり始め、残念ながら足元では一部の分野を除き全般に亘り低迷が広がってきている。海外調達及び海外シフトの影響や欧州危機を起点とする景気減速が長期化しそうな情勢を考慮すると、今回の受注低迷は当分続く気配が濃厚と見られる。

【建設機械】

日本建設機械工業会の統計によると、10月の出荷金額は、前年比3ヶ月連続でのマイナス。国内向けは全般的に堅調で22.4%の増加となっているものの、海外向けは中国やその他新興国の不振が大きく足を引っ張って、合計では▲32.9%の大幅な落ち込みとなった。今後は復興関連での需要増を待ちたい。

・油圧ショベル

国内の販売は被災地向けも販売増に寄与し前年比でプラスにはいるが、輸出の大幅な落ち込みにより合計で▲22.7%。需要家の生産調整の幅は、在庫調整を狙い販売減よりもさらに大きくなるため、部会シャーでは一時帰休を検討し始めるほどの加工量の大幅減少(30~40%減)となっている。建機の中では最大ウエイトの機種だけに関係シャーへの影響は大きく、早期の回復に期待したい。

・建設用クレーン

ラフテレーンクレーンは、排ガス規制前の駆け込みもあり足元は堅調を持続している。しかしながら、規制後の新モデルの販売及び生産がうまく軌道に乗れば良いが、年度明けからは反動減の可能性が高いと見られているだけに、来年度の生産計画も10%程度の減産計画となっている。

クローラクレーンは、これまで長期に亘る低迷が続いていたが、国内新車需要が30%強の増加となっている点や北米向けが回復に転じている事から、6月以降は需要家の生産台数も増えており、ほぼ在庫調整は完了したものと見られる。今後は急回復は期待できないまでも販売=生産の正常な状態に戻りそうである。

【鉱山機械】

鉱物資源需要の減少と価格の下落による鉱山開発の中止・延期から、鉱山機械の売れ行きが激減しこの生産調整は長期化しそうな感がある。足元の受注では主力機種でピーク時の75%減の加工量となっているものもあるが、概ね下期は上期比40%減前後のレベルまで落ちている。鉱山機械は主に大型・超大型が対象となるだけに、需要家の生産調整はシャーの加工重量そのものの大幅減少に直結し、長期の活況を予定していた関係シャーは在庫急増の問題も抱え苦悩している。

【重電】

国内での原発案件がほぼ停止している中で、火力発電関連は内外ともに案件は多く期

待を持ちたいが、需要家の受注がどれだけ部会シャーの加工に結び付くかが問題である。海外移管は進展しており、この部門も需要の減少と海外シフトのダブルパンチに見舞われている。また国内火力のリプレース案件は今後も期待の大きいところではあるが、これまではほとんど見られなかった競争入札による調達先分散の動きがある現在では、さらなる競争激化が予想される。

昇降機は、発注のタオレから一時的に受注減の現象もあったが、足元は山が高く下期は、ほぼ前年並みの量を確保できる見込みである。

【板金・鍛圧機械】

鍛圧業界の受注動向では10月で▲16%。「世界的な景気減速とエコカー補助の終了による国内減速が波及（工業会）」していると見られる。中国・欧州向けの成約減で、シャーの加工量は上期比で約▲30%の状況まで落ち込んでいる模様。需要家の機械別受注状況では、プレス（▲32%）、パンチング（▲17%）の大幅減に対しベンダーは+12%と健闘している。

【フォークリフト】

今年度の生産予定は当初横ばい乃至微減の計画ではあったが、足元は一割以上の減産となっている。国内向けは増加（+9%）しているが輸出の減少（▲15%）が響き、加工量としては大幅減。需要家の海外への生産移管や業界再編の動きも着々と進展しており、厳しい受注環境は当分続きそうである。

【ダンプ・トレーラー】

ダンプ・トレーラーは、排ガス規制前の駆け込みと被災地向けの需要から長期に亘り高操業の状況が続いている。また海外向けとして発電機・変圧器付きトレーラーの大口成約もあり、この部門の年度内操業は確実に堅調さを持続できそうである。

【産機 店売り】

末端実需の不振による長期低迷から未だ回復の見通しが立たない部門である。今年に入ってから受注量はさらに悪化しており、概ね前年比 10%～15%程度は量的に落込んでいる模様である。長期に亘る低迷のダメージは大きく、また金融円滑化法の期限切れによる与信問題もあり、まだまだ難しい経営状況が続きそうである。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成23年3月出荷分。厚板シャー工組調べ）

・ 建 築 用 :	34%	(37%)
・ 土 木 用 (橋梁、鉄塔等) :	14%	(17%)
・ 建産機用 :	30%	(26%)
・ 輸送機用 (船舶、自動車) :	8%	(8%)
・ 重電用 :	2%	(2%)
・ その他 (鉄道車両、容器、二次製品)	12%	(10%)

(注) カッコ内の数字は、21年3月時点の最終用途比率。

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ一業の厚中板在庫推移

(H 2 4 . 1 2 . 1 2)

組合員の厚中板在庫推移(165社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項 目	23/12末	24/3末	6月末	9月末	12月末	24/3末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在 庫 量	365	360	343	348	340	335
前期比/量	▲5	▲5	▲17	5	▲8	▲5
在 庫 率	202.8	181.1	188.6	217.8	200.0	197.1

【コメント】

- 在庫量は、大震災の影響と建設需要の低迷により、23年4月～9月末にかけて37～38万トンの高水準で推移したが、ようやく昨年秋以降、需要の底入れ機運と慎重な仕入れ姿勢を反映して減少傾向を辿った。今年夏場以降、建産機需要が急激に落ち込んだため、足元の在庫数量は、8月末344千ト、9月末348千ト、10月末351千トとやや増加傾向で推移。11月末(速報)は345千トと減少。
- 一方、在庫率は、今年1月までは一貫して200%を超えて推移したが、2月～7月にかけては低下傾向を辿り、200%以下の適正状況が続いた。しかし8月末206%、9月末218%、10月204%、11月204%(速報)と需要の急減を映し、再び200%台で推移している。
- 12月末及び3月末の在庫数量は、シヤ一各社の需要に見合った抑制的な仕入れ姿勢が堅持されれば、12月末340千ト、3月末335千ト程度まで圧縮されるとみられる。
- 一方、在庫率は、仮に月間出荷量が17万トン前後で推移すると、12月末は200%、3月末は197%程度と推定され、高止まり状態から徐々に適正水準まで低下すると予想される(適正水準は200%以下)。
- シヤ一各社は、建設及び建産機需要ともに低調を余儀なくされると見込まれることから、需要全体の動向を注視しながら、在庫管理にはより一層細心の注意が必要である。

以 上